佐久間象山（しょうざん）雅号呼称の決め手

——恵明寺（えみようじ）山号「ぞうざん」から山名「ぞうざん」へそして雅号「しょうざん」へ——

高橋　宏

「佐久間象山（しょうざん）没後百三十年特別展」が1994年（平成6年）8月24日から10月10日まで長野市松代で開催されたが，見学者観光客が多数詰めかけて大盛況であったとは，残念ながら，言えないような状況であった。佐久間象山（しょうざん）の不運の一つは，その人格と思想と行動とにおいて，坂本龍馬や勝海舟に見ることが出来るような，大衆の圧倒的支持を獲得し得る程のカリスマ性を持ち得なかったことであろう。かなり以前，或る件に関して，『龍馬が行く』の著者，司馬遼太郎氏に書信を差し上げたことがある。その中で，恐る恐る「佐久間象山を小説の中で取り上げてはいただけまいか」と申し上げてみたところ，「象山は好きになれない」との御返書であった。1990年（平成2年）10月，長野市の平和地所株式会社会長の中沢袈裟美氏が，文化勲章受章者の彫刻家富永直樹氏に製作してもらった佐久間象山の銅像を川中島古戦場に建立し，長野市に寄贈したところ，「目障りだ」と言う声が市民の中から起こった，と地元紙『信濃毎日新聞』が報じた。高知市桂浜に突っ立ち太平洋を睥睨する坂本龍馬の大銅像及び近年新築されたモダンな高知県立坂本龍馬記念館が，いずれも高知県民の発意と寄付金とで建立され，毎年数十万人の観光客を惹きつけている，という話を想起しないではおれないのである。

この偉人のもう一つの不幸は，その雅号「象山」の読み方が未だに統一されず，混乱していることである。この混乱状態は，佐久間氏が天保7年（1836年）満25歳で「象山」を雅号として採用した直後から既に始まっていた，と思われる節がある。江戸や地元松代藩の漢学者や門人達は漢音で「しょうざん」と呼んでいたようであるが，武家達や地元住民の中には「ぞうざん」と呼ぶ人が少なくなかったようである。現在に至っても，何らかの決着がついたとは言えない状態である。「ぞうざん」呼称が正しいと言う人達と「しょうざん」呼称の正当性を主張する人達との間では，ああ言えばこう言う，こう言えばああ言う，というような状態で，相手の言い分に虚心に耳を傾けようとする余裕が議論の場には感じられない。何が玉で何が石なのか，何が筋の通った議論なのか何が団子理屈に過ぎないのか，さっぱり分からず，遂には，どちらでもいいではないか，地元では「ぞうざん」と言い，他郷では「しょうざん」と呼べばよろしいのだ，というところで事態を収めようとする。しかし，事はそれ程単純ではないと思われる。このような二重呼称を認めることになると，いつまで経ってもトラブルは消えないだろう。一番困るのは，ドラマやテレビの旅行関連番組やクイズ番組に携わっている放送作家やディレクターなどであろう。どちらかの呼称に決めなければならない必要性に必ず迫られることになるであろう。又，地元長野県で「ぞうざん」呼称に慣れ

親しんで来た子供達の中には，筆者自身がそうであったように，いずれ「しょうざん」という呼び方もあることを知って戸惑いを覚える向きも出て来るであろう。このような無用な混乱はないに越したことはない。大体，人名呼称については，余りきちんとした一つの呼び方にこだわらなくてもよいではないか，という「鷹揚派」と，正式な呼称以外の呼び方は認めないという「几帳面派」とがあるようである。筆者の友人に「祐吉」君と「宏吉」君とがいる。前者は「すけよし」が正式名ではあるが，「ゆうきち」と呼ばれても構わないと言っている。後者は「ひろよし」以外の呼び方では呼ばれたくないと言っている。佐久間象山が「鷹揚派」であって，「ぞうざん」でも「しょうざん」でもよいと言っているのであるならば，或いは，自号の読み方については何もコメントしていないのであるならば，二重呼称も止むを得ないかもしれない。しかし，これは大事なことであるのだが，佐久間象山が自分の雅号の由来と読み方とを自ら明らかにしている文書が夫々一通ずつ残されているのである。『象山説』と『松代本誓寺三部経縮軸添記』とである。この二つの文書を虚心坦懐に読み解き，佐久間象山の意図するところを正確に把握することが，この呼称問題解決への第一歩であるのだが，口幅ったいことを言うようで恐縮であるが，従来の諸家の解読には詰めの甘い点があったように思われてならない。

混乱の第一・恵明寺（えみょうじ）山号と山名との関係

今「ぞうざん」と呼ばれている山は，佐久間象山（しょうざん）が名を成す頃までは，山頂に西条氏の古城があったため「城山（じょうやま）」と呼ばれていた。旧藩時代には海津城を手に取る如く俯瞰し得るを以て，みだりに庶民の登るを許さなかったものだ，とこの山の所有者であり，浩瀚な『佐久間象山』（岩波書店，昭７・２・25）の著者である宮本仲氏は述べている（28頁）。又その東南面に竹林が繁茂しているので，「竹山（たけやま）」とも呼ばれていたとのことである（同書同頁）。さて，江戸時代は延宝５年（1677年）にこの山の麓に黄檗宗の一寺が名僧の聞こえある良寂禅師によって開山されたが，良寂禅師はその師である木庵禅師に対する尊敬の念篤き故を以て木庵禅師を開山祖師となし，自分は第二世と称した。この弟子の篤実なる行いに感激した木庵禅師は「山僧，東へ渡って来て初めて開山を得た。『象山恵明寺（ぞうざん えみょうじ）』とこれを名付くべし。けだし象山とは，もともと支那泉州にあり，和尚が初めて禅に出会った場所であるから，その故旧を忘れざるを示すためである」と言われた，と良寂禅師の行業記にある（大平喜間多『佐久間象山逸話集』信濃毎日新聞社，昭８・４・10，８頁）。つまり，山麓の寺の山号としてここに初めて「象山」という号が登場するが，命名者は木庵禅師であり，この禅師の最初の修行の場である支那泉州の「象山」にちなんで名付けられたのである。山の名と恵明寺の山号とは，本来何の関係もなかったのである。そして，この項の最初に述べたように，佐久間氏が有名になるまでは，この山のことを「象山」と呼ぶ人はいなかったのである。既に「城山」或いは「竹山」という名称が付いていたからである。

混乱の第二・佐久間象山の誤認と勇み足

諸家の発言から勘案すると，山の名については，地元の人達は大体「竹山」と呼んでいたようである。山麓には「竹山町」という一画もある。では何故「象山」がこの山の名として人の口の端にのぼるようになったかというと，佐久間象山の恵明寺山号に関する誤解と，そ

れを更に押し進めて「土人」を巻き込んでの新名称の発明と解説とのせいであった。

宮本仲氏の父君宮本慎助に宛てた書簡の中で，佐久間氏は以下のように言っている。

「彼の山に象山の号これ有り候事恵明寺の古き額にその字面見え候ばかり人の心づかず居り候所にて僕よりこれを発し候は格別の事にてはこれなく候へども，...」

上記において，佐久間氏の誤認というのは，恵明寺の額にある山号に「象山」という文字を見て，背に負うている山の名から取った山号であろうと推量したことである。佐久間氏は山に本来「象山（ぞうざん）」という号があったとしたのである。そのことに人々は気づいていなかったので，僕が最初にそれを借用して自分の雅号としたのだ，と述べている。寺院の名前に冠する称号として山号が用いられるようになったのは，中国では禅宗が盛んになった唐代からで，我が国でも禅宗渡来後に行われるようになった。多くの場合，寺院は山の中に建てられるところから，その山の名を寺院名の上に冠するようになったのである。であるから，佐久間氏が「象山」を恵明寺裏山の秘められたる名前であると早とちりしてしまったことも，あながち責めることは出来ないのである。ただ，真実は，先刻述べたように，寺の山号「象山」は支那泉州の象山に由来するのである，ということである。

山に「象山」という名ありきと誤認した佐久間氏は，更に推量を押し進めて，この名前の由来は山が象に似ていることにある，とするのである。その『象山記』には，「その状象に似る。因ってこれを象山と言う」とあるし，その『象山説』では，「予が廬の西南に巨陵奮起す。その状厳然として象に類す。土人目して象山と言う」と述べる。後者において，「土地の人がこれを見て象山と呼ぶ」と言っているのは，先刻の宮本慎助への手紙で「人々はそのことに気づいていなかった」と指摘したことから顧みると，勇み足とでも言いたくなる言辞ではなかろうか。この頃，この山は地元の人々によって「象山」とは未だ呼ばれていなかったのである。佐久間氏の発明の部分は，従って，次のようになろうか。①山に古来「象山」という名があったとしたこと。②象に似ている山だから「象山」と土地の人々が呼んでいるとしたこと。念のため，再度言っておくが，以上の２点は，実は，事実とは余りにも掛け離れていることなのである。しかし，結果的には，明治維新後佐久間象山の名声が高まるにつれて，以上の佐久間氏の認識と解説とが説得力を持ち始め，「竹山」という本名は消滅して行き，漸次「象山（ぞうざん）」という名前で山は呼ばれるようになって行ったのである。一人の漢学者の残した文章が，一つの山の名前を変える程の影響力を持ち得たと言えるのであろう。そして，改めて確認しておきたいことは次のことである。本来なら，山の名が先にあって，それをその山の中或いは近くにある寺院が山号として採用する，という順序であるのだが，この場合，寺の山号「象山（ぞうざん）」が先ずあって，そこからもともとなかった筈の「象山（ぞうざん）」という山名が「発見」され，やがて本名を押しのけて地元の人々の是認を得るに至るのである。

混乱の第三・陸象山（しょうざん）と佐久間象山（しょうざん）との関係

陸九淵は，中国は南宗の思想家，字は子静。13歳の時古典の中に「宇宙」の２字を見て，忽然として悟るところがあったという。客観世界を主観の中に取り込んでしまう，いわば，アメリカ19世紀のエマスンの超絶主義に似た陸学の骨子が出来上がったのである。「心」と「理」と「宇宙」とは一体のものである，とする主張は，同時代の朱子学とは相容れないものであったが，後の明代の陽明学への道を開いたのである。この人は，49歳の時江西省貴溪

の応天山を象山と命名して，そこに精舎を開き多数の学徒とともに講学に励んだのであった。そこでこの人は「象山先生」と呼ばれていたのである。

さて，この陸象山と佐久間象山とは，結論的に言ってしまうと，夫々の号は字面も読み方も全く同一であるのだが，佐久間氏は，朱子学の人であり陸学を認めることは出来ないので，陸子の号を借用したというのではなく，地元松代の山「象山」から号を取ったのである。ここにおいて，非常に分かりにくく大方の拒絶反応を招来するであろうと思われるところのものは，山名「ぞうざん」から取った雅号が「しょうざん」となることであろう。「ぞう」は呉音であり，「しょう」は漢音である。漢学者である佐久間氏の号は，当然のことながら，漢音で読むべきである，というのは正論であると思われるのだが，ところが，これに対して，例えば，「ぞうざん」雅号呼称派の原点に位置すると言ってよい宮本仲氏は，「『ざうざん』と呉音に呼ぶのがよろしい」と言い，更に「吾の号をとるや則ち山を以てなりと言はれて居るが其山の名は『しやう山』ではなく『ざう山』である。従って『ざう山』と呼ぶのが本当であることが判るではないか」と主張するのである（『佐久間象山』岩波書店，昭７・２・25，24-25頁）。しかし，竹の生えている山「たけやま」から取る雅号が「ちくざん」となるように，象に似ている山「ぞうざん」から取る雅号が「しょうざん」となることはあり得るのである。あり得ないと言い切ることは出来ないだろう。つまり，「山名から取ったから」という前提だけでの議論は，結局は水掛け論に終わらざるを得ないのである。

では，決め手はないのであろうか。あるのである。既に提示してあるように，『象山説』と『松代本誓寺三部経縮軸添記』とをきちんと読み解き，佐久間氏の意図を正確に把握することである。この二つの文書の解読で，細心の注意を払わなければならない点は，次の３点であろう。①二つの文書が微妙に関連し合っていることを感得すること。②一部の文言だけを取り出してつつくのでなく，全文をきちんと読み通すこと。③『添記』の方に特に，洒落っ気が溢れていることを感知すること。真面目過ぎるアプローチでは，佐久間氏に嗤われること必定である。以上の３点に気をつけながら，この２文書の中で佐久間象山が伝えんとするメッセジをきちんと受け止めてみたいのである。ただ，これも結論的に言っておくと，２文書にも夫々立証能力に差異があって，『象山説』の方は本来雅号の由来を説明するもので，その読み方については決定的な根拠を示し得ていない。「象山」という文字にルビなどによる発音上の配慮がなされてはいないので，前後関係によって「ぞうざん」か「しょうざん」かに読み分けることしか出来ない。夫々の「象山」をどう読むかについては，水掛け論に終わるか，こちらの方がやや優勢かとしか言いようがないのである。『松代本誓寺三部経縮軸添記』の方は，反切法という漢字の読み方を規定する方法によって，明確に「象」の字の発音が示されているので，十分な決め手たり得る重要な基本資料ということが出来る。

『象山説』・立証能力の限界

原文は，勿論，漢文であるが，読み下し文にして以下に示してみよう。諸家の読み下し文を参考にさせていただいたし，専門家の直接の御指導もいただいたが，文責は全て筆者にある。なるたけ現代風に，思い切って文字を替えたり，読み下し方も伝統的なルールから逸脱していると思われる程にしてみたが，これは一に分かり易くするためであり，原文の持つ意味を損なうことはないように心掛けたつもりである。例えば，「曰う」は「言う」に，「其

の」は「その」に，「因って」は「よって」に，「抑」は「そもそも」に，「但」は「ただ」に，「夫の」及び「彼の」は「かの」に改めた。そして出来るだけルビを振ることにした。更に，「象山」が6回出て来るが，夫々に括弧をつけ，番号をつけておくことにした。

昔，陸子静は貴溪の「象山」①に学を講ず。人よってこれを号して「象山」②先生と言う。　予が廬の西南に巨陵奮起す。その状厳然として象に類す。土人目して「象山」③と言う。すなわち，余もまた遂に「象山」④を以て自ら号す。或る人言う，「子は志気豪雄にして，鋭然として斯道を以て任と為す。常に称す，『天下一物として吾が体にあらざるなく，一事として吾が用にあらざるなし。その君を堯舜とし，その民を成康とするは，もとより吾が分内の事なり』と。その気象もまたほぼ陸子に似るあり。今また「象山」⑤を以て号と為す。これ殆ど将に自ら陸子に比せんとするか。然らずんば，昔の人藺相如を慕いて，相如に名を更う。すなわち子もまた陸子に慕うあるなり」と。余これに応えて言う，「ああ，子の言，始めはすなわち過ぎたり，而して終わりはまた及ばず。かの陸子，躬行かの如くそれ厳なり。政治かの如くそれ美なり。文辞を著わすはかの如くそれ勁遒なり。これその天資に出ずといえども，そもそもまた功力の致す所。陸子，誠に及ぶべからず。而して吾何ぞ敢えて自らこれに比せんや。ただその理を見るは高尚に過ぎ，心を存するは易簡に失す。而して法度の正，節目の詳，察せざるあり。ここを以て規模腔殻はすでに広大を致すといえども，終にまたかの禅仏の偏に淪むを免れず。豈に惜しまざらんや。ああ，学術は慎まざるべからず。その人の賢なるや陸子の如きといえども，なお以て聖人の室に入るを得ざるは，他なし，また学術の正しからざるに由るのみ。予かつて竊にここに見るあり。故に学を為すの方，一に程朱を以て準と為す。将に以て敬に居りて理を窮め，序に循いて精を致し，精粗遺さず，内外こもごも養い，以て明体達用の学に庶幾せんとす。而るに子顧って以て彼を慕うと為すか。そもそも吾の号を取るや，すなわち山を以てなり。もとより陸子に事とする所なし。然れども既に「象山」⑥と言う。それ彼を以て自ら警むるにすなわちこれあり。もしすなわち徒にその言を口にしその行を身にせず，虚しくその名を仮りてその実を践まず，陽に正学を以て自ら表わし，陰に以て俗儒利名の轍を駆馳騁騖するあらば，これすなわち世道の蠹賊なるのみ。すなわち豈にただ孔孟程朱に罪を獲るのみならんや，すなわち陸子に罪を獲て，天下の人々はまた得てしてこれを誅するなり。これ最も以て自ら警めざるべからず」と。

読み下しとはいえ，上記文はいかにも現代人にはなじみのない文言が多い。そこで，原文に即しながらも，出来る限り現代風に書き直してみたい。分かり易いように少々言葉も補ってみよう。

昔，陸子静は貴溪の「象山」①で学問を講じていた。人々はそれに因んでこの人を号して「象山」②先生と言っていた。我が家の西南に大きな山が立ちはだかっていて，その姿が象に似ているので，土地の人々は「象山」③と言っている。そこで私もまた遂に「象山」④と自ら号するようになったのである。或る人が次のように言った，「あなたは，逞しい志と鋭い気迫を以て学問の道に励んでおられ，常に『天下に私が会得していないも

のは一つとてなく，私が用いることの出来ないものは一つとてない。主君を堯舜のような名君に仕立て上げ，民を周の成王康王時代の民のような良民に育てることは，もとより私のなし得る領分の中にある』と申しておられる。その気性もまたほぼ陸子に似ておられる。そして，今また『象山』⑤を雅号とされた。これは案ずるに，まさに陸子と肩を並べようとのおつもりなのでしょうか。そうでないとおっしゃるのなら，昔，藺相如を慕うあまり，自分の名を相如と替えた人がいたが，あなたもまた陸子を慕っておられるのでしょう」と。私はこれに答えて次のように言ったのである，「ああ，あなたのお言葉のうち，始めの部分は言い過ぎ，そして終わりの部分はまた言い足りない，と申し上げなければなりません。かの陸子について言うならば，その実践はあのように厳しく，その政治はあのように美しく，その文章表現たるやあのように力強い。これは生まれつきの資質によるものではあるが，同時にまたその努力の結果でもある。このような点で，私如き者は陸子には到底及びもつかないのです。何で敢えてこのような人と肩を並べようなどと私が考えましょうや。ただ，陸子の場合，道理の見極め方が高尚過ぎるし，精神の在り方において安易な方向へ向かう傾向があり，法制の正否や規則の詳細について理解していない所があります。今までで既にその学問の規模内容形態は広大なものとなってはおりますが，遂にまたかの禅宗の持つ偏見に陥らざるを得ないのです。まことに惜しむべきことではないでしょうか。ああ，学術においては，慎みを忘れてはいけません。陸子のような賢明な人であっても，未だに聖人として祠に入れてもらえないでいるのは，ただひとえにその学術が正しくないという理由によるのです。私はかつてひそかにこの点に注目しておりましたので，学問を進めて行く方向としては，一に程子朱子の学を基準として来ておるのです。精神を集中させ物事の道理を窮め，順序に従い心を純粋に保ち，些細なことも大雑把なことも捨ててしまわず，内面も外面もともども修養に努め，そうすることによって，事物現象の本質を明らかにしそれを生活の中に実際に応用出来るような学問に少しでも近づこうとしているのです。このような訳であるのに，あなたはむしろ私が陸子を慕っているとおっしゃるのですか。そもそも私が自分の雅号を取ったのは，山からでありました。もとより陸子の雅号を用いているということはないのです。しかしながら，既に陸子と同じように『象山』⑥と称しているのです。ですから，陸子を私自身への自戒のよすがとしているのは，まさにこの点にあるのです。つまり，もしもただ徒にその言葉は口にするがその行いは身につけず，空しくその名を借りるだけでその教えは実践しようとせず，表向きは正しい学問にいそしんでいるように見せかけ，陰では俗世間の泥にまみれた儒者の名声利益追求の後を追って一緒になって走り回るようなことであるならば，これこそまさに世間の道理を食い荒らす害虫の如き悪人としか言いようがありません。もし万一これ程に堕落してしまったとするならば，これはただ単に私が師と仰ぐ孔子孟子程子朱子に対して罪を犯すことになるのみならず，たまたま同号を共有する陸子に対しても罪を犯すこととなり，天下の人々はまた得てしてこのような点を糾弾するのであります。このような点について，最も自戒しなければならない，と考えているのです」と。

上記の現代風読み下し文において，注目しなければならないポイントは次の３点かと思われる。

(1)　象に似ている山は③におけるが如く「ぞうざん」と呼ぶが，それを雅号とした場合には，漢音で④におけるように「しょうざん」とする。「私もまた遂に」と言っていることは，「私もまた陸子が山に因んで『しょうざん』と号したように遂に」ということで，ここでの含意は，陸子と同じく「しょうざん」と号した，というところまで行くのである。しかし，「ぞうざん」呼称派は，陸子が「しょうざん」という山に因んで「しょうざん」と号したように，私もまた「ぞうざん」という山に因んで「ぞうざん」と号した，という意味であると主張するであろう。これは，全くの水掛け論となってしまわざるを得ない。ここまででは，決め手は見つからないとしか言いようがない。この部分を「ぞうざん」派は決め手として提示するが，その立証能力には限界があると言わざるを得ないのである。別な言い方をすると，説得力が「十分」でない，ということである。別の主張を完全に否定し切ることが出来ていないからである。

(2)　陸学は正しいとは思えないので自分の目標としていないし，陸子を慕っていることもないので，陸子の雅号を自分の号として使わせてもらっているという訳ではなく，私の号は山の名から取ったのである。しかし，⑥に見るように，陸子と同じく「しょうざん」と既に号していることは事実なのである，と言っていることが注目されるのである。「ぞうざん」派は，陸子の学問とは相容れないから，陸子の号「しょうざん」を取る筈はなく，山の名から取って既に「ぞうざん」という明確な別称を採用してしまっているのだ，と解釈することであろう。ここにおいても，水掛け論となる気配が濃厚である。

(3)　陸子のことをいつも頭に置いておいて，自らを戒めようと努める理由は，自分が陸子と同じ「しょうざん」を雅号としているからである，と言っているのである。雅号が同じであるからこそ，もし自分が表向きは正しい学問に励んでいる振りをしながら，陰で名声や利益を追求する俗儒に堕落してしまっているとするならば，孔子孟子程子朱子の顔に泥を塗ることになるのは勿論のこと，「陸象山（しょうざん）」の顔にも泥を塗ることになってしまう。「しょうざん」と「陸象山」を気取っていてもあのざまは何事だ，という訳である。世間の人々はこのようなことを得てして囃し立てたがるものなので，そのようにならないように一番気をつけなければならない，と自戒しているのである。「ぞうざん」派は，これは決め手にはなるまい，と言うであろうが，これは水掛け論とは言え，説得力において，「しょうざん」読みの方がやや優勢である，と言えるのではなかろうか。

『松代本誓寺三部経縮軸添記』・十分なる決め手

弘化２年（1845年）３月，江戸は神田お玉が池の象山書院において，黒川良安との間で蘭学と和漢学との交換教授を行っていた佐久間象山は，故郷松代の寺町にある古刹本誓寺に三部経の縮軸を奉納させた。そして，奉納の趣旨を述べたペン書きの一枚の『添記』を添えたのである。三部経奉納の趣旨はこうである。「この三部経は私修理がオランダ人に命じて銅刻させたものである。自分の菩提を祈ったり，仏像堂塔を建立するつもりではない。鎮護国家のためであり，私心は全くないので，天神地祇の怒りに触れることはなかろう。納経する気になったのは，時代に対する嫌悪の心からで，善悪を論ぜず，凡人の評などを聞くつもりもない。私の国家への微衷には，新田義貞という五百年前の同志がいる。本誓寺如来の前に哀愍摂護を願い奉り，銅刻の銅は直ちに溶かして銃丸の材料とするのである。」微衷という

言葉の意味は，ささやかな忠義の心ということで，新田義貞という名前は，実は，この『添記』の中には出ては来ないのであって，ただ「五百年の同志の資あり」とあるのみである。この寺は，浄土真宗大谷派平林山新田院本誓寺と称し，この寺の四代目の住職宗信が，新田義貞の末男に当たる人で，父義貞が暦応元年（1338年）討ち死にした後，7歳でこの寺の弟子になったという。「五百年の同志」とは新田義貞のことであろうと推量するのである。なお，この寺には後醍醐天皇が着されたという袈裟が残されている。

さて，雅号呼称問題を解く最も重要な鍵となるものは，実は，この『添記』の最後に添えられた4行の漢文の追記なのである。結論的に言うと，「象」は「しょう」と，「山」は「さん」と読むべし，と後世の人々に指示しているのである。雅号の読みについて，既にトラブルが起きていたか，或いは，いずれはトラブルが生ずるであろうと予想していたことを感じさせる文書である。この文書についても，始めは読み下し文を，次いで現代風読み下し文を，まず，掲げておこう。読み下しについては，専門の漢学者の御教示も受けたが，文責は，勿論，全て筆者にある。

なお記す。吾が居は薪蒸篠簜の蒙雑に擁蔽するの間に在り。而して潺々たるの水音を聞く。殆ど象の嘯くに似たり。予晏起して志遅々たり。もしそれ後人我が名を呼ばば，応に知るべし，象は所蔵の反，山は参なりと。

なお記しておく。我が家は，大小の雑木や竹が藪竹林となって乱雑に覆いかぶさって来るような場所にある。そして，さらさらというせせらぎが聞こえて来るが，殆ど象の嘯くのに似ている。私は寝坊ばかりしていて，志す仕事は遅々としてなかなか進まない。もし後世の人々が私の名前をお呼びになるならば，次のことを知っていただかなければならない。すなわち，「象」は「所」「蔵」の反で決め，「山」は「参」と読むのである。

上記の『添記』の最後の「追記」において，注目しなければならない問題点はやはり次の3点かと思われるのである。

(1) ここにおいて，「象」の「読み方」が明確に本人によって指示されている，ということである。「象」の発音についての必要にして十分なる基本的資料であり，「決め手」としての決定的な意義を持つものである，と言ってよかろう。ただ，その発音の提示方法が現代人にとっては既になじみのないものであるという点は，佐久間氏にとって不運と言わざるを得ないのである。仮名文字でも添えてくれていたら，現代においても何のトラブルも生じなかったであろうに，「反切法」という本来中国において文字の発音を規定するために用いられていた方法を，日本風に変化してしまっている漢字の音の読みの確定のために採用しているので，我々「後人」としては，やや困惑を覚えると言わざるを得ない。

さて，「『象』は『所』『蔵』の反」とは何を言おうとしているのかというと，「象」の発音は「所」（sho）の頭部子音（sh）と「蔵」（sou）の尾部韻（ou）とを合成して「しょう」（shou）と作るべし，と指示しているのである。ただ，以上の帰字（象）・上字（所）・下字（蔵）の3文字は，いずれも日本風ではあるが「漢音」で読んでいる。夫々に，実は，「呉音」があるので話が少々ややこしくなるのである。「呉音」で読むとすると，「所」（so）の

頭部子音（s）と「蔵」（zou）の尾部韻（ou）とで「そう」（sou）となる。ところが，「象」の「呉音」は「ぞう」（zou）であり，この文字に本来「そう」の発音はないので，従って，「象」の発音は「しょう」一つだけ，と確定出来るのである。

(2)　神田お玉が池の竹藪の中の川のせせらぎに，何故佐久間象山は唐突なイメジを喚起するであろうことを承知の上で，「象」の嘯きを聞いたのであろうか。この文書を議論の場に上せた諸家の受け止め方にも戸惑いが感ぜられ，解説にばらつきがある。例えば，「ぞうざん」読みをよしとする市川本太郎氏は，「象山の雅号のよみかたについて」という論考の中で，この「象」の喚起するイメジについて，かなり積極的な解釈をしている。すなわち，「象の嘯くが如くに聞えたのは如何にも気持よく感ぜられ」とし，更に，「先に『所蔵反』には『しょう』と『ざう』の二音あることを示したが，この文意より見て，あくまで動物の象の嘯くのを主体としているので，『所蔵』の反切は『ざう』を採るべきである」とし，「所蔵の反」からの音は「ぞう」であるとの主張の論拠に「象」を置くのである。そして更に，「この文は象山先生が三十五歳の時書いたもので，血気盛んな時代で，『三十以後は乃ち天下に繋るあるを知る』と述べているように，象の嘯くが如く天下に活躍せんとする意を示したものと思われる」と述べ，佐久間氏の旺盛なる血気を「象」の嘯きの中に見ている（『信濃教育』第1156号，1983年［昭和58年］3月号，18頁）。一方，「しょうざん」読みの立場を一貫して取っている小林計一郎氏は，むしろ消極的なイメジで受け取っていて，その「象山はショウザン」という論考の中で，「わが居は雑木や藤づるなどがおいしげり，おおいかぶさる中にあり，さらさらという水音を聞く。まるで象がうそぶいているようである。私は志を起すのがおそく，遅々としている。（従って後人は私を象の如しと思うものもあろう。）」と述べる（『信濃教育』第1156号，1983年［昭和58年］3月号，5頁）。つまり，佐久間氏の遅々とした動きを「象」の上に反映させているのである。「象」はのろのろと動く動物であるというイメジが喚起されているのである。

しかし，ここでは上の2氏のように，「象」の持つであろう象徴的な意味について考えることは，不必要なことではなかろうか。神田お玉が池の「象」というのは，佐久間象山の洒落であって，彼はただ鼻の長い動物の「ぞう」という音を前以て提示しておきたかっただけである，と承知すればよいのである。この音を持ち出すために，薪蒸篠蕩と潺々たるの水音とでわざわざ大袈裟な舞台作りをしたのである。虚仮威しに騙されてはいけない。動物は確かに「ぞう」と読むけれども，自分の雅号の中で読む場合には，漢音で「しょう」と読んでもらいたい，というのが佐久間象山の後世の人々へのひそかなるメッセジであったのである。「ぞう」という呉音が見事に「しょう」という漢音にひっくりかえることがあるのだ，ということを意表をつく具体的なイメジ作りで示して見せたのである。象山は，多分，にやりとほくそ笑んでいることであろう。

(3)　「ぞう」が「しょう」に変わることがあるのだ，というメッセジを持つ『添記』を『象山説』の横に置いてみると，なお一層象山の意図がはっきりして来ると思われる。この『添記』のメッセジは，多分，『象山説』の初めの部分を読んだ，或いは読むであろう，人々に向けられたものであろうと想像されるのである。つまり，「象」に似ている山ということで「ぞうざん」と呼び，それを雅号としたのだから，そのまま人をも「ぞうざん」と呼ぶのが正しい，と考える人々に対して，「ぞう」という動物はいるが，自分の雅号の中の

「象」は読みが「しょう」と変わるのだ，ということを『添記』で念押ししたかったのであろうと推量されるのである。山は「ぞうざん」と呼び，人は「しょうざん」と称する。山名と雅号とは読みを区別すべし，と佐久間象山は釘を刺しておきたかったのであろう。

信濃教育会・宮本仲氏・象山神社

信濃教育会が明治27・28年戦役の後，美しい心情を養うために作った小学唱歌で，今は県歌になっている『信濃の国』では，「ぞうざん佐久間先生も皆この国の人にして」と歌われていて，信州人は大方「ぞうざん」になじんでいる。また，地元長野市松代では，古老達が口を揃えて「代々皆が『ぞうざん』と呼んで来た」と言っているという。しかし，一寸待って欲しい。果たして本当にそうであろうか。好著『佐久間象山逸話集』（信濃毎日新聞社，1933年［昭和８年］４月）や調べものをする時に非常に役に立つ名著『佐久間象山』（吉川弘文館，1959年［昭和34年］４月）の著者である大平喜間多氏は，地元長野市松代の郷土史研究家であるが，一貫して雅号「しょうざん」の正当性を主張し続けていた。そして，実は，地元松代でも大正から昭和に年号が変わる頃までは，「しょうざん」呼称が主流を占めていたのである。埴科郡教育会は，大正２年（1913年）に『感応公と象山先生』を，また翌大正３年（1914年）に『佐久間象山』を出版しているが，いずれにおいても「しやうざん」とルビを振っている。そして，未だ「象山神社」は創立されてはいなかったが，象山先生遺跡表彰会が大正５年（1916年）に出版した『佐久間象山』でも「しやうざん」読みが採用されているのである。また，後で掲げるリストで見ていただけば分かると思うが，明治大正時代に出た象山の伝記では，「しょうざん」読みの方が圧倒的に多いのである。このような傾向にストップをかけて，「ぞうざん」呼称の正しさを喧伝し県内に定着させ，更に県外にも影響を及ぼしたのが，地元出身の宮本仲氏であり，大正７年（1918年）から昭和９年（1934年）まで８期信濃教育会会長の職にあった佐藤寅太郎氏及びその周辺の人々，地元の人々であった。宮本仲氏は，松代の佐久間象山生家のすぐそばで生まれ育ち，近くの象に似た山は松代藩主から宮本家に与えられたものであるという。この山は最近長野市に寄贈された，という話を聞いている。宮本氏はその浩瀚な『佐久間象山』（岩波書店，1932年［昭和７年］）の中で，既に紹介したように，「吾の号をとるや則ち山を以てなりと言はれて居るが其山の名は『しやう山』ではなく『ざう山』である。従って『ざう山』と呼ぶのが本当であることが判るではないか」（25頁）と主張した。この主張は，非常に明快であるが故に県内でも県外でも，急速に受け入れられ始めたようである。更に，信濃教育会は昭和９年（1934年）に『増訂象山全集』全５巻（信濃毎日新聞社）を出版し，その中で「ざうざん」とルビを振った。そして，昭和４年（1929年）５月内務大臣に対して「象山神社」創立の請願が提出され，翌年昭和５年（1930年）５月創立許可が下りたのであった。この時「ぞうざんじんじゃ」と命名するに当たっては，信濃教育会会長佐藤寅太郎氏の意見が大いに働いたという。また，神社創立発起人は宮本仲氏であった。そして，昭和13年11月神社の鎮座祭が執行されたのであった。

このような佐久間象山顕彰の大いなる盛り上がりの中で，地元では「しょうざん」が正しいと信じる人々の多くはものが言えないような状況になってしまったのである。明治大正期から現在までに出版された象山関係の伝記や象山記事の載っている辞典事典類・歴史書・風

土記・全集・談話集・解説書・論文・新聞記事の類いにざっと目を通してみると，「ぞうざん」読みと「しょうざん」読みとの割合がかなり変化して来ていることが分かる。明治大正期は，「しょうざん」の方がほぼ3倍程の比率で多数派を占めていたが，昭和初期から昭和30年（1955年）頃までは「しょうざん」は徐々に数を減らして行き，特に昭和20年代は，全体の出版数が減ってもいるが，「ぞうざん」の3分の1以下という有様であった。ところが，昭和30年を過ぎる頃から徐々に逆転現象が起こり始め，「しょうざん」の方が「ぞうざん」を上回り始めたのである。昭和61年から平成6年（1994年）までの9年間では，「しょうざん」は「ぞうざん」のほぼ2倍を占めている。この傾向を支える要因の一つは，「ぞうざん」説を取っていた向きが徐々に「しょうざん」説を取るようになって来た，ということが上げられると思う。例えば，吉川弘文館の『国史大辞典』は，明治41年版では「ぞうざん」としていたが，昭和60年版では「しょうざん」としている。平凡社の『世界大百科事典』は，昭和40年版までは「ぞうざん」であったが，昭和56年版で「しょうざん」に踏み切った。更に，京都大学文学部国史研究室の『日本史辞典』は，昭和49年の改訂増補版までは「ぞうざん」としていたが，平成2年（1990年）の『新編日本史辞典』では「しょうざん」を採用するに至った。

象山関連文献呼称別年代順リスト

文献資料を閲覧させていただいたのは，主として以下の図書館・記念館である。長野県立長野図書館・長野市立図書館・信濃教育博物館（長野市）・信州大学付属図書館（松本市）・信州大学付属図書館教育学部分館（長野市）・上田市立図書館・臼井吉見文学館（長野県南安曇郡堀金村）。見落としている文献も多々あろうかと思われるが，象山呼称の推移の傾向の一端は窺い知ることが出来るであろう。事典類の中で，説明文に「しょうざん」とも言うとあっても，見出しが「ぞうざん」であれば，それによって分類した。逆の場合もある。「ざうざん」「しやうざん」は夫々「ぞうざん」「しょうざん」に読み替えた。

なお，個人的に資料を提供して下さった方々については，謝意を込めてその資料名の後にお名前を記載させていただくことにした。

明治大正期（58年間・1868—1925）

◆ぞうざん（5点）

A）伝記

1）故小此木秀野遺稿『佐久間象山』裳華房，明32・5・5，5頁。

B）事典類

1）『国史大辞典』吉川弘文館，明41・7・19，1192頁。

C）歴史書類

1）信濃史談会『信濃之人』求光閣書店，大3・10・5，1頁。

D）その他

1）竹内義光『佐久間象山翁・東都飛鳥山名誉の碑文桜乃賦望岳の賦講義総かなつき俗解』小宮山寿，明33・6・12。

2）内堀小信編（柄沢義郎付解）『桜賦註解』全，忠清会，明37・12・10，緒言1頁。

●しょうざん（14点）

A）伝記

1）清水義寿『信濃英傑佐久間象山大志伝』上，高美甚左衛門，明15・7・20。

2）塚原渋柿『佐久間象山』少年読本第三十九編，博文館，明34・9・14，4頁。

3）斎藤謙『佐久間象山』隆文館，明43・1・1，84—85頁。

4）山路愛山『佐久間象山』東亜堂書房，明44・8・16，1頁。

5）埴科郡教育会『感応公と象山先生』寺沢汲古館，大2・10・5。

6）埴科教育会『佐久間象山』富田文陽堂，大3・2・5，1頁。

7）象山先生遺跡表彰会『佐久間象山』明治図書，大5・5・15，8頁。

B）事典類

1）『日本人名辞典』恩文閣，大3・9月，427頁。（清原為芳氏）

2）『新版大日本人名辞書』大日本人名辞書刊行会，大15・3月。（清原為芳氏）

C）歴史書類

1）伯爵土方久元他『明治天皇御聖徳』鏡美堂書店，大2・4月，220頁。（岡沢祐吉氏）

2）大平喜間多『松代風土記』松代町共和堂書店・東京市松陽堂書店，大2・10・11，86頁。

3）原昌通『波乱重畳幕末明治大正史』天之巻，松本書院出版部，大9・11・12，43頁。

4）江東天風『幕末流血史』中央出版部，大15・3・18，2頁。

D）その他

1）薄田泣菫（谷沢永一他編）『完本・茶話』中，冨山房百科文庫38，昭58・11・25（初出は『大阪毎日新聞』夕刊コラム，大6・9・8），370頁。

昭和元年—10年（1926—1935）

◆ぞうざん（7点）

A）伝記

1）寺門咲平『維新の先覚者佐久間象山』西沢書店，昭6・5・2，1頁。

2）宮本仲『佐久間象山』岩波書店，昭7・2・25，23—19頁（「しやう山かざう山か」という論考あり）。

3）堀内信水『世界的大偉人佐久間象山』不動書房，昭8・12・20。

4）清水松涛『佐久間象山先生と仏教』信濃郷土誌刊行会，昭10・11・20，113—134頁（「象山考」という論考あり）。

B）事典類

1）小柳司気太監修（小川貫道編）『漢学者伝記及著述集覧』名著刊行会，昭45・2・16（原本は昭10・4月出版），230頁。

C）歴史書類

1）村田直治『信濃風物誌』名古屋新聞社出版部，昭3・8・10，25頁。

2）信濃教育会『増訂象山全集』1，信濃毎日新聞社，昭9・7・10。

●しょうざん（9点）

A）伝記

1）大平喜間多『佐久間象山』信濃郷土叢書第8編，信濃郷土文化普及会，昭7・10・10，序1頁。

2）大平喜間多『佐久間象山逸話集』信濃毎日新聞社，昭8・4・10，6—12頁（「象山の称呼に就いて」という論考あり）。

3）仁木松雄『日本精神作興講話佐久間象山編』都祥閣，昭10・2・20。

B）事典類

1）『図解現代百科辞典』3，三省堂，昭7・6・20，942頁。（原昌義氏）
2）『大百科事典』平凡社，昭7・9月，442頁。（清原為芳氏）
3）『大辞典』11・12，平凡社，昭10・6・30初版，昭28・9・10縮刷第1刷。

C）歴史書類
1）頭山満（武劉生編）『幕末三舟伝』昭5・3・26（平2・8・10島津書房より再版），227頁。

D）その他
1）刀水漁史「ざう山か，しやう山か」『集古』第6巻（昭5・11月号），196頁。
2）「［ラジオ版］九十歳の石黒忠悳子佐久間象山を語る」『読売新聞』昭9・7・11，15頁。

昭和11年―20年（1936―1945）

◆ぞうざん（7点）

A）伝記
1）飯島忠夫（真田幸世編）『象山佐久間先生』象山神社奉賛会，昭13・11・3。
2）赤尾藤市『佐久間象山』三教書院，昭17・7・5，12―13頁。
3）金子鷹之助『佐久間象山の人と思想』今日の問題社，昭18・6・31，10頁。（安江昭祐氏）

B）事典類
1）信濃教育会更級部会・埴科部会編『更級郡埴科郡人名辞典』象山社，昭14・2・11。
2）『国史辞典』4，冨山房，昭18・12・8，368頁。

C）歴史書類
1）玖村敏雄「関係人物略伝」『吉田松陰全集』10［復刻版全10巻］，山口県教育会編，岩波書店，昭61・12・10（原本は山口県教育会『吉田松陰全集』全10巻定本版，岩波書店，昭11・4・21），154頁。（岡沢祐吉氏）
2）武田勘治『松陰と象山』第一出版協会，昭18・1・20，8頁。

●しょうざん（11点）

A）伝記　なし

B）事典類
1）『新訂版大日本人名辞書』2，大日本人名辞書刊行会，昭12・3・20。
2）『日本人名大事典』3，平凡社，昭12・10・22，82頁。
3）日置昌一『日本歴史人名辞典』名著刊行会，昭48・4・29（原本初版は昭13・10月）。

C）歴史書類
1）晩山得富太郎『幕末防長勤王史談』十巻之内第一巻，幕末防長勤王史談刊行会，昭12・7・8，84頁。
2）溝口白羊『明治維新英傑列伝』大洋社出版部，昭13・11・30，480頁。
3）大阪毎日新聞社京都支局『維新の史蹟』星野書店，昭14・6・1，120頁。

D）その他
1）『菊池寛文学全集』7，文芸春秋新社，昭35・4・20（当該記事が書かれたのは昭14・2月），322―323頁。
2）森銑三「ザウ山かシヤウ山か・ノボルかノボリか」『伝記』第8巻第3号（昭16・3・15），15頁。
3）森銑三「佐久間シヤウ山」『伝記』第8巻第4号（昭16・4・15），2―3頁。
4）大泉園「『象山』の読方」「鉄筆」『朝日新聞』昭17・12・29夕刊。
5）尾佐竹猛「象山自身」「鉄筆」『朝日新聞』昭18・1・20夕刊。

昭和21年—30年（1946—1955）

◆ぞうざん（7点）

A）伝記　なし

B）事典類

1）和歌森太郎『日本歴史事典』実業之日本社，昭27・3・5。

2）『世界人名辞典』1東洋編，東京堂，昭27・6・15，353頁。

3）『世界歴史事典』8，平凡社，昭28・2・10。

4）『新編人名事典』国民図書刊行会，昭28・4・20。

5）『世界人名百科辞典』河出書房，昭28・11・5。

6）京都大学文学部国史研究室『日本史辞典』創元社，昭29・12・25，201頁。

7）諸橋轍次『大漢和辞典』1，大修館書店，昭30・11・3，693頁。

●しょうざん（2点）

A）伝記

1）塚原健二郎「佐久間象山」『世界伝記全集』28，講談社，昭30・9・30，1頁。（原昌義氏）

B）事典類

1）『大人名事典』3，平凡社，昭28・12・23。

昭和31年—40年（1956—1965）

◆ぞうざん（11点）

A）伝記　なし

B）事典類

1）『増訂日本歴史事典』実業之日本社，昭33・6・20。

2）『玉川百科大辞典』13日本歴史，誠文堂新光社，昭35・1・30。

3）『日本百科大事典』6，小学館，昭38・7・25，319頁。

4）村沢武夫編『信濃人物誌』信濃人物誌刊行会，昭39・5・20，196頁。

5）『日本文化史辞典』朝倉書店，昭37・11・30。

6）『日本と世界の人名大事典』むさし書房，昭39・8・1。

7）『世界大百科事典』9，平凡社，昭40・11・20。

C）歴史書類

1）鈴木泰二編『日本史にかがやく101人の物語』下，学習研究社，昭39・8・20，126頁。

D）その他

1）原淳造「随想・象山のよびかた（上）・（下）」『北信民報』昭29・3・15及び3・22。（原昌義氏）

2）木村岳諷編『皇漢名詩の吟じ方』日本詩吟学院岳諷会，昭39・4月，57頁。（佐藤重亘氏）

3）高橋雲峰・田中誠三郎・原淳造・保崎清太郎・宮下幹・恩田安信「佐久間象山をしのんで（座談会）」『信濃教育』第935号，昭39・10月号，71—72頁。

●しょうざん（12点）

A）伝記

1）大平喜間多『佐久間象山』人物叢書23，吉川弘文館，昭34・4・30，1—5頁（「『しょうざん』が正しい」という論考あり）。

2）新村出他『佐久間象山先生』京都象山会，昭39・7・11，38—39頁。

3）塚原健二郎『少年よみもの佐久間象山』信濃教育会，昭40・2・10，59頁。

B）事典類

1）『日本歴史大辞典』9，河出書房新社，昭33・3・30。

2）『国民百科事典』3，平凡社，昭36・8・30，352頁。

3）森銑三編『人物逸話辞典』上，東京堂出版，昭38・3・5，392頁。

C）歴史書類

1）『図説日本文化史大系』10江戸時代下，小学館，昭32・5・25，256頁。

2）『幕末・明治・大正・昭和日本人物百年史』信濃毎日新聞社，昭33・5・15。

3）『日本の歴史』10明治維新，読売新聞社，昭34・11・11，119頁。

4）小林計一郎「松代藩」『物語藩史』3，人物往来社，昭39・12・1，190頁。

5）遠山茂樹編『維新の群像』人物日本の歴史10，読売新聞社，昭40・12・1，55頁。

6）上川淳『明治維新』少年少女おはなし日本歴史8，岩崎書店，昭40・12・15，191頁。

昭和41年―50年（1966―1975）

◆ぞうざん（23点）

A）伝記

1）龍野咲人『佐久間象山』新人物往来社，昭50・8・10，32―38頁（「星と象山」という論考あり）。

2）斎藤勲編『日本の先覚者佐久間象山』象山神社奉賛維持会，昭50・12・31，61―62頁。

B）事典類

1）『現代新百科事典』3，学習研究社，昭41・3・1。

2）『世界原色百科事典』4，小学館，昭41・5・20，20頁。（佐藤重亘氏）

3）『三省堂新国語中辞典』昭42・1・1，765頁。

4）『大日本百科事典ジャポニカ』8，小学館，昭44・4・25。

5）『社会科学大事典』8，鹿島研究所出版会，昭44・6・10。

6）『学生のための世界人名事典』教学研究社，昭44・10月，148頁。

7）『伝記人物事典』日本編，保育社，昭46・7・1，232頁。

8）『グランド現代百科事典』9，学習研究社，昭47・2・20。

9）『ブリタニカ国際大百科事典』8，ティビーエス・ブリタニカ，昭48・7・1。

10）『長野県百科事典』信濃毎日新聞社，昭49・1・10。

11）京都大学文学部国史研究室編『改訂増補日本史辞典』東京創元社，昭49・3・25。

C）歴史書類

1）鹿野政直編『幕末思想集』日本の思想20，筑摩書房，昭44・7・5，142頁。

2）犬丸義一他『物語日本近代史』1，新日本出版社，昭45・8・30，49頁。

3）鹿野政直『明治維新につくした人々』さえら伝記ライブラリー18，さえら書房，昭41・12・10，11頁。

4）勝部真長編『勝海舟自伝・氷川清話』広池学園事業部，昭42・6・1，65頁。

5）勝海舟（勝部真長編）『氷川清話』角川文庫，昭47・4・30，60頁。

6）勝部真長『海舟覚え書』エルム，昭49・7・10，79頁。

7）勝部真長「勝海舟」『人物日本の歴史』19維新の群像，小学館，昭49・12・25，34頁。

D）その他

1）内田与一「佐久間象山は『ぞうざん』か『しょうざん』か」『長野』第44号（1972の4），長野郷土史研究会，昭47・7月，69―71頁。

2）象山神社奉賛維持会編『佐久間象山先生直筆桜賦望岳賦余年二十以後碑文解説書』象山神

社，昭48・11・1，10頁。

3）長野市立松代小学校松代文武学校編集委員会編『松代文武学校』同会，昭50・10・25，25頁。（清原為芳氏）

●しょうざん（27点）

A）伝記　なし

B）事典類

1）『学研新世紀大辞典』学習研究社，昭43・4・1。

2）『明治維新人物事典・幕末編』至誠堂新書39，昭41・7・30，124頁。

3）『日本歴史大辞典・増補改訂版』5，河出書房新社，昭43・12・15。

4）田島清（編集代表）『信州人物誌』信州人物誌刊行会，昭44・8・30。

5）『小百科事典』平凡社，昭48・3・2。

6）『万有百科大事典』5日本歴史，小学館，昭48・4・10。

7）佐藤直助他編『新版世界人名辞典』日本編，東京堂出版，昭48・11・15。

8）『日本国語大辞典』8，小学館，昭49・3・1。

9）『Encyclopedia Epoca 学芸百科事典』8，旺文社，昭49・12・5，64頁。

10）『歴史人物辞典』ぎょうせい，昭50・9・16。

11）岡田要他監修『スタディジャンプ・別巻2・じんめいじてん』暁教育図書，昭50・11・1，63頁。

12）『日本史人名辞典』歴史図書社，昭50・12・20，227頁。

C）歴史書類

1）高木卓他『改訂新装ジュニア版・日本の歴史』4明治・大正・昭和，読売新聞社，昭41・5・5，12頁。

2）小西四郎『日本の歴史』19，中央公論社，昭41・8・15，8頁。

3）田中彰『明治維新』少年少女日本の歴史7，偕成社，昭42・4・25，141頁。

4）児玉幸多（編集委員代表）『改訂新版・図説日本文化大系』10江戸時代（下），小学館，昭42・6・10，260頁。

5）南原公平『信州歴史散歩一起伏する群像』創元社，昭46・4・10，145頁。

6）佐藤昌介他『渡辺崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』日本思想大系55，岩波書店，昭46・6・25，238頁，684―685頁（解説追記に植手通有氏の呼称についての論考あり）。

7）笠原一男『詳説日本史研究』山川出版社，昭46・7・30，310頁。

8）福地重孝監修『幕末維新人物100選』秋田書店，昭47・8・15。

9）舟戸安之『勝海舟・物語と史蹟をたずねて』成美堂，昭48・4・1，26頁。

10）塚田正明『長野県の歴史』県史シリーズ20，山川出版社，昭49・5・25，209頁。

11）海音寺潮五郎（著者代表）『日本史探訪』11，角川書店，昭49・7・30，122頁。

12）長野県高等学校歴史研究会『長野県の歴史散歩』全国歴史散歩シリーズ20，山川出版社，昭50・9・27，18頁。

13）芝原拓自『日本の歴史』23開国，小学館，昭50・12・25，65頁。

D）その他

1）『森銑三著作集』5，中央公論社，昭46・3・25，475頁。（田子檀氏）

2）笛木悌治編『象山松陰慨世余聞解説版』（原本は斎藤丁治『象山松陰慨世余聞』丸善商社書店，明22・3・19）富士見書房，昭50・11・30，序文2頁，解説編4頁。

昭和51年—60年（1976—1985）

◆ぞうざん（40点）

A）伝記

1）前野喜代治『佐久間象山再考』研究・資料シリーズ2，銀河書房，昭52・2・1，32頁。

2）倉田信久（前沢英雄編）『佐久間象山』象山神社奉賛維持会，昭54・10・11再版。

3）高畑常信・小尾郊一『大塩中斎・佐久間象山』叢書・日本の思想家38，明徳出版社，昭56・12・25，156—158頁。

4）田中誠三郎『佐久間象山の実像』銀河書房，昭58・4・30，14頁。

5）前沢英雄『佐久間象山の生涯』象山神社奉賛維持会，昭59・3・31，207頁。

B）事典類

1）藤井貞文他監修『藩史事典』秋田書店，昭51・5・25，234頁。

2）古川貞雄『郷土歴史人物事典・長野』第一法規，昭53・2・15，64頁。

3）『日本近現代史辞典』東洋経済新報社，昭53・4・5。

4）奈良本辰也監修『幕末維新人名事典』学芸書林，昭53・4・10。

5）白木靖美（編集責任者）『ゴールド版ベスト教科書事典・図解百科』4，学研，昭54・6・1，276頁。

6）福井英夫（編集責任者）『学研ハイベスト教科事典・Grand Hi-best』7日本歴史，学習研究社，昭55・11・1，268頁。

7）『長野県百科事典・増補版』信濃毎日新聞社，昭56・3・10。

8）坂本太郎監修『日本史小辞典』山川出版社，昭57・5・1，276頁。

9）福井英夫（編集責任者）『図詳ガッケン・エリア教科事典・改訂新版』1日本歴史，昭57・9・1，317頁。

10）小林信明編『新選漢和辞典・新版机上版』小学館，昭58・1・20，73頁。

11）尾鍋輝彦他監修『改訂増補・偉人の研究事典』小峰書店，昭59・4・20，134頁。

12）瀬川健一郎編『日本世界・小学歴史人名事典』むさし書房，昭60・5・10，150頁。

C）歴史書類

1）勝部真長『知られざる海舟』東京書籍，昭52・6・32，64頁。

2）平尾道雄『維新暗殺秘録』新人物往来社，昭53・1・25，154頁。

3）児玉幸多他『武家と町人』ジュニア日本の歴史5，小学館，昭53・11・10，229頁。

4）『図説学習・日本の歴史』7，旺文社，昭54・3・20，179頁。

5）上田篤監修『史跡と人物でつづる長野県の歴史』光文書院，昭54・6・1，141—145頁。

6）太田美明監修『信州の先人たち』光文書院，昭56・9・10，212頁。

7）風間泰男監修『日本の歴史人物ものがたり・普及版』下・江戸時代—現代，旺文社，昭56・9・20，179—181頁。

8）『松代—歴史と文化—』信濃毎日新聞社，昭60・7・20，99—96頁。

9）上田正昭他『解明日本史』文英堂，昭58・2・1，293頁。

10）児玉幸多監修『親と子のための長野県の歴史』信濃毎日新聞社，昭60・11・10，163頁。

D）その他

1）倉田信久『象山先生の号について』青雨草庵，昭52・春日，1—6頁。

2）「時ならぬ『佐久間象山』論議—『花神』でしょうざん」『信濃毎日新聞』昭52・3・12，16頁（長野県教育委員会の見解を紹介）。

3）中村佐伝治『「信濃の国」物語』信濃毎日新聞社，昭53・10・10，137頁。

4）佐久間昌章『信濃路ガイド』成美堂出版，昭53・11・10，72頁。

5）『各駅停車・全国歴史散歩21・長野県』河出書房新社，昭54・4・30，226頁。
6）原淳造遺稿（原昌義編）『千葉の星影』昭57・9・26，224—226頁。（原昌義氏）
7）市川本太郎「象山の雅号のよみかたについて」『信濃教育』第1156号（昭58・3月号），9—19頁。
8）清水憲雄「私の『ぞうざん』説」同上，19—25頁。
9）高橋貞重「さくまぞうざん先生の雅号について」同上，25—28頁。
10）中村佐伝治「佐久間象山の称号について」同上，28—33頁。
11）市川健夫他編著『県歌信濃の国』銀河書房，昭59・2・12，205頁。
12）高橋雲峰「佐久間家の系譜と象山の書」『象山の書』（市川本太郎他編）信濃毎日新聞社，昭59・9・1，219頁。
13）土屋正晴『佐久間象山論雑考』アドバイス社，昭55・9月，6頁。

◉しょうざん（56点）

A）伝記

1）井出孫六『杏花爛漫・小説佐久間象山』上，朝日新聞社，昭58・10・28，208—226頁（「しょうざん」を採用するに至る経緯の解説あり）。

B）事典類

1）高柳光寿他編『日本史辞典』角川書店，昭51・5・30。
2）『grand universe 講談社大百科事典』11，昭52・10・11，72頁。
3）豊田武他監修『Junior Epoca 旺文社教科学習大事典』9日本の歴史，昭52・12・6，400頁。
4）『学研学習百科大事典』1日本の歴史，学研，昭53・2・1，413頁。
5）藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社，昭53・4・1，61頁。
6）『世界伝記大事典』日本・朝鮮・中国編2，ほるぷ，昭53・7・1。
7）近藤春雄『中国学芸大事典』大修館書店，昭53・10・20，262頁。
8）竹内理三編『日本史小辞典』角川小辞典24，角川書店，昭53・10・30，365頁。
9）『21世紀世界百科カロラマ』4，主婦と生活社，昭54・1・1。
10）『世界大百科事典』12，平凡社，昭56・4・20。
11）日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館，昭56・9・10。
12）諸橋轍次他『広漢和辞典』上，大修館書店，昭56・11・3，179頁。
13）『人物レファレンス事典』II近世編，日外アソシエーツ，昭58・1・10。
14）『角川国語大辞典』角川書店，昭58・1・25，818頁。
15）『三省堂日本史小事典・第3版』昭58・2・15。
16）『科学史技術史事典』弘文堂，昭58・3・10，391頁。
17）『日本史事典』平凡社，昭58・3・20。
18）新村出編『広辞苑・第3版』岩波書店，昭58・12・6，950頁。
19）『平凡社大百科事典』6，昭60・3・25。
20）『世界歴史大事典』8，教育出版センター，昭60・4・25。
21）『普及新版・日本歴史大辞典』5，河出書房新社，昭60・5・31，84頁。
22）『国史大辞典』6，吉川弘文館，昭60・11・1，315頁。
23）小林計一郎『郷土史事典・長野県』昌平社，昭54・3・20，169頁。
24）『日本歴史大辞典』5，河出書房新社，昭54・11・1，84—85頁。
25）『ミリオーネ全世界事典・Il Milione』9アジアⅣ・日本・韓国・北朝鮮・フィリピン・マレーシア・シンガポール・ブルネイ・インドネシア，学習研究社，昭55・11・1，121頁。

26）『マイボックス［学習と生活］情報百科』三省堂，昭56・10・1，992頁。
27）『小百科事典・増補改訂版』平凡社，昭57・3・15，534頁。
28）小林計一郎編『改訂・郷土史事典』16長野県，昌平社，昭57・11・20，133頁。
29）『大事典 desk』講談社，昭58・5・25，678頁。
30）『旺文社百科事典［エポカ］』8，昭58・10・20，64頁。
31）*Kodansha Encyclopedia of Japan*, Vol. 7，講談社，昭58・11・25，3—4頁。（斎藤襄治氏）
32）近藤春雄『日本漢文学大事典』明治書院，昭60・3・25，261頁。
33）『名号引き近世人名辞典』2・日本書誌学大系36（2），青裳堂書店，昭60・11・30，126頁。
34）『フレンド・ジャポニカ・小学館全教科学習大百科事典』2日本の歴史・世界の歴史，昭55・4・25，43頁。

C）歴史書類

1）『新編物語藩史』4，新人物往来社，昭51・9・1，131頁。
2）早乙女貢『幕末の群像』新人物往来社，昭54・2・10，78頁。
3）『日本歴史展望』10，旺文社，昭58・12・15，70頁。
4）青木孝寿他『長野県の百年』県民百年史20，山川出版社，昭58・4・20，24頁。
5）長文連『幕末維新史の謎』日本文芸社，昭53・9・20，136頁。
6）森銑三『おらんだ正月—江戸時代の科学者達—』冨山房百科文庫20，昭53・10・9，279頁。
7）稲垣史生「文久の暗殺者たち」『ライバル激突の日本史』5，国際情報社，昭54・10・20，42頁。
8）乾宏巳編『史料大系・日本の歴史』6幕末維新，大阪書籍，昭55・3・31，198頁。
9）樋口清之『歴史と文化をささえた人々』学習日本史図鑑9，講談社，昭55・4・20，78頁。
10）南原公平他『新版・信州歴史の旅』令文社，昭56・3・20，42頁。
11）長野県商工会連合会青年部編『長野県ガイドブック—信州の風土と産業・文化—』昭58・3・10，299頁。
12）古川清行『近代日本を開いた人々』人物と文化遺産で語る日本の歴史7，みずうみ書房，昭58・9・22，39頁。
13）山田洸『幕末維新の思想家たち』青木書店，昭58・11・15，32頁。

D）その他

1）『定本版・山本有三全集』3，新潮社，昭51・12・25，265—270頁。
2）「時ならぬ『佐久間象山』論議—『花神』でしょうざん」『信濃毎日新聞』昭52・3・12，16頁（NHKの統一見解を紹介）。
3）小林計一郎「『しょうざん』か『ぞうざん』か」『信濃毎日新聞』昭52・3・15，9頁。
4）新田大作編『和漢名詩の吟じ方』笠間書院，昭55・11・1，54頁。（佐藤重亘氏）
5）「佐久間象山は『ショウザン』—直筆で振り仮名—長野の神社“のぼり”」『信濃毎日新聞』昭57・4・25，23頁（小林計一郎氏の解説にて蚊里田神社の幟の解説メモを紹介）。
6）井出孫六「再びゾウザンかショウザンか」『信濃毎日新聞・夕刊「今日の視角」』昭57・6・10，1頁。
7）小林計一郎「『象山』の読み方論争—『ショウザン』説の根拠」『信濃毎日新聞』昭57・6・11，11頁
8）小林計一郎「象山はショウザン」『信濃教育』第1156号（昭58・3月号），4—8頁。

昭和61年—平成6年（9年間・1986—1994）

◆ぞうざん（30点）

A）伝記

1）長野市校長会編『佐久間象山・長野市の先人に学ぶ・第1集』長野市教育委員会，平3・12・15，6頁。（松下信二氏）

B）事典類

1）『郷土資料事典』県別シリーズ19，人文社，昭63・4・20，29頁。

2）*The New Encyclopedia Britannica*, Vol. 10, Chicago: Encyclopedia Britannica, Inc., 1989（平1），345頁。

3）『パーソナル人名事典・日本世界』むさし書房，平1・6・20，273頁。

4）『長野県歴史人物大事典』郷土出版社，平1・7・16。

5）『長野県風土記』旺文社，昭61・6・10，30頁。

6）『新選漢和辞典・第5版』小学館，昭62・1・20，70頁。

7）『小学生世界人名事典』87年版，教学研究社，昭62・1月，144頁。

8）『図詳エリア教科事典・新訂版』1日本歴史，学習研究社，昭63・10・1，317頁。

9）鎌田正他『大漢語林』大修館書店，平4・4・25，75頁。

10）芳賀幸四郎監修『年表式日本史小事典』文英堂，昭63・3・10，149頁。

11）『郷土資料事典・観光と旅・改訂新版』県別シリーズ20長野県，人文社，平1・7・1，29頁。

C）歴史書類

1）鈴木亨編『新編・藩史総覧』歴史と旅臨時増刊号（第15巻第11号・昭63・7・5号），秋田書店，157頁。

2）長野県高等学校教育文化会議社会科教育研究会編『史料が語る長野の歴史60話』三省堂，平1・7・10，148頁。

3）風間泰男監修『図説学習日本の歴史・改訂新版』7，旺文社，平2・4・10，179—181頁。

4）田中誠三郎「戦国の名舞台に真田の表向かざる歴史」『城下町にねむる群像の野望』ふるさと歴史舞台2，ぎょうせい，平3・5・10，121頁。

5）長野市教育会編『小学校社会科資料集・高学年用・わたくしたちの郷土（平成4年度）』平4・4・1，95頁。

6）『読める年表日本史・増補改訂版』自由国民社，平4・11・20，802頁。

7）東伸宏編『ジュニア日本史大図鑑』学習研究社，平5・3・1，329頁。

8）嶋岡晨「青春の燃焼・幕末の詩人たち」『エッセイで楽しむ日本の歴史』下，文芸春秋，平5・11・1，380頁。

9）長野県高等学校歴史研究会『新版・長野県の歴史散歩』新全国歴史散歩シリーズ20，山川出版社，平6・4・30，82頁。

D）その他

1）柳沢和恵「象山神社創建のころ」『長野』第132号（1987の2），昭62・3月，29—32頁。

2）門脇弘「『しょうざん』か『ぞうざん』か」『宗教新聞』昭62・6・20。（門脇弘氏）

3）長野県教育委員会監修『長野県文化財総合目録』八十二文化財団，昭63・1月，8頁。

4）長野県企画監修（協力・長野県121市町村）『信州・ザ・お国自慢121』信州自治研究会，昭63・11・28，250頁。

5）高井鴻山伝編纂委員会『高井鴻山伝』小布施町，昭63・12・9，456頁

6）長野県観光連盟編『ふるさとの散歩道・改訂新版』平2・3月，73頁。

7）中村佐伝治『県歌「信濃の国」を考える』ほおずき書籍，平２・11・30，６頁。
8）松本市教育会浅井洌遺稿集編集委員会『浅井洌』平２・12・20，218頁。
9）長野市教育委員会企画編集『新訂・長野市の文化財』第一法規，平３・７・29，216頁。

●しょうざん（67点）

A）伝記

1）源圓了『佐久間象山』歴史人物シリーズ・幕末維新の群像８，ＰＨＰ研究所，平２・３・23，64―70頁（「しょうざん」と読む理由の解説あり）。

B）事典類

1）『日本大百科全書』10，小学館，昭61・７・１。
2）『名数歴史人物辞典』恵友社，昭61・９・１。
3）『三百藩家臣人名事典』３，新人物往来社，昭63・４・20。
4）『名前から引く人名辞典』日外アソシエーツ，昭63・４・22。
5）『大辞林』三省堂，昭63・11・３，962頁。
6）『国語大辞典・新装版』小学館，昭63・11・10，1034頁。
7）『新訂・日本重要人物辞典』教育社，昭63・12・10。
8）『講談社カラー版・日本語大辞典』平１・11・６，767頁。
9）『歴史人名よみかた辞典』日外アソシエーツ，平１・12・14。
10）梅棹忠夫監修『世界歴史大事典』22，教育出版センター，昭61・１・25，72頁（原昌義氏）
11）本間三郎（編集責任者）『教科書にでる人物学習事典』２，学研，昭61・３・３，432頁。
12）都築洋次郎編著『科学技術人名事典』北樹出版，昭61・３・５，194頁。
13）『THE 日本・日本が見える日本が読める大事典・Visual Human Life』講談社，昭61・７・１，1038頁。
14）『日本人物事典』現代知識情報事典９・人物Ｉ，国土社，平１・４・25，41頁。
15）『コンサイス学習人名事典・修訂版』三省堂，平１・５・１，343頁。
16）『国語大辞典・言泉』小学館，昭61・12・20，921頁。
17）本間三郎（編集責任者）『改訂新版・小中学校の教科書にでる学習人物事典』学研，平１・９・９，188頁。
18）奈良本辰也監修『図説幕末維新おもしろ事典』三笠書房，平１・10・10，55頁。
19）『マイペディア・新装改訂・小百科事典』平凡社，平２・２・20，537頁。
20）上田正昭他監修『コンサイス日本人名事典・改訂版』三省堂，平２・４・15，561頁。
21）真尾栄編・奈良本辰也監修『幕末維新ものしり事典』主婦と生活社，平２・５・20，134頁。
22）京大日本史辞典編纂会編『新編・日本史辞典』東京創元社，平２・６・５，408頁。
23）増田信一編『人物を調べる事典』リブリオ出版，平２・６・20，161頁。
24）『号・別名辞典・古代－近世』日外アソシエーツ，平２・６・20，274頁。
25）『雑学幕末維新ものしり百科』日東書院，平２・７・20，286頁。
26）佐藤直助他編『新版世界人名辞典・増補版』日本編，東京堂出版，平２・７・25，298頁。
27）『新潮日本人名辞典』新潮社，平３・３・５，795頁。
28）宮地正人監修『国際人事典―幕末維新―』毎日コミュニケーションズ，平３・６・30，245頁。
29）上田正昭他監修『コンサイス日本人名事典・改訂版机上版』三省堂，平３・９・１，561頁。
30）林陸朗他編『日本史総合辞典』東京書籍，平３・11・10，714頁。
31）新村出編『広辞苑・第４版』岩波書店，平３・11・15，1021頁。
32）樋口清之監修・伊東章夫他まんが『学研まんが日本の歴史別巻・教科書人物事典』学習研

究社，平３，164頁。
33）『近世史用語事典』新人物往来社，平５・１・20，119頁。
34）『集英社国語辞典・机上版』平５・２・25，661頁。
35）上田万年他編『新大字典・普及版』講談社，平５・３・11，2200頁。
36）『日本史大事典』３（こ－し），平凡社，平５・５・18，598頁。
37）『集英社国語辞典・横組机上版』平５・６・13，651頁。
38）『辞林21・机上版』三省堂，平５・11・１，821頁。
39）エドウィン・O・ライシャワー他監修『*JAPAN: An Illustrated Encyclopedia*・カラーペディア英文日本大事典』講談社，平５・11・10，1301頁。
40）宮崎十三八他編『幕末維新人名事典』新人物往来社，平６・２・20，444頁。
41）『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社，平６・11・30，733頁。

C）歴史書類

１）土田直鎮他監修・高村直助編『開国への渦潮』海外視点・日本の歴史12，ぎょうせい，昭61・１・20，84頁。
２）泉秀樹『幕末維新人物100話』立風書房，昭62・５・10。
３）林英夫編『戦乱の日本史・合戦と人物』12，第一法規出版，昭63・６・25，33頁。
４）南原公平他『新版・信州歴史の旅』令文社，昭62・９・20，42頁。
５）牧野昇他監修・加藤秀俊他編『全国の伝承・江戸時代・人づくり風土記』20長野，農山漁村文化協会，昭63・２・24，220頁，325―331頁。
６）綱渕謙錠『人物列伝幕末維新史』講談社，昭63・２・25，102頁。（藤沢愛僖氏）
７）古川貞雄（責任編集）『図説長野県の歴史』図説日本の歴史20，河出書房新社，昭63・３・５，214頁。
８）本間三郎（責任編集者）『幕末激動のあとをたどる』テーマ別・目で見る日本の歴史７，学習研究社，昭63・３・17，19頁。
９）稲垣史生『考証・江戸を歩く』時事通信社，昭63・11・10，175頁。
10）信州大学教育学部歴史研究会編『おはなし長野県の歴史』信濃教育会出版部，平１・４・10，210頁。
11）小野塚克治『詳述日本史』聖文社，平１・４・15，212頁。
12）古川薫『吉田松陰』歴史人物シリーズ・幕末維新の群像11，ＰＨＰ研究所，平２・５・25，37頁。
13）杉山義法『勝海舟』日本テレビ放送網，平３・１・10，46頁。
14）宇野俊一他編『日本全史・ジャパン・クロニック』講談社，平３・３・15，894頁。
15）石黒忠悳「象山先生訪問と玄関払いほか」『史話・日本の歴史23・時代を駆け抜けた志士・開国と攘夷』（清原康正他編・梅原猛他監修）作品社，平３・４・15，151頁。
16）真尾栄編『名言名句が語る人物日本史』主婦と生活社，平３・６・15，468頁。
17）古川清行『スーパー日本史』講談社，平３・９・15，465頁。
18）船岡誠『学習図説小学校社会科全集17・日本の歴史Ⅲ・江戸幕府の政治と文化』国土社，平５・４・10，54頁。
19）塚本学監修・青木孝寿編・青木歳幸執筆・山田ゴロ作画『まんが信州の歴史』４改革に生きる・近世Ⅱ，信濃毎日新聞社，平５・11・１，72―90頁。
20）『日本歴史館』小学館，平５・12・10，861頁。

D）その他

１）日本詩吟学院岳諷会編『和漢名詩の吟じ方』大修館書店，昭61・10月，36頁。（佐藤重亘

氏）
2）松永ひろし他『信州・Uガイド18』昭文社，昭63・4月，34頁。
3）高橋宏「佐久間象山の呼称」『UP』第202号，東大出版会，平1・8月号，18—23頁。
4）高橋宏「象山称呼の問題点」『長野』第151号（1990の3），平2・5月号，1—24頁。
5）高橋宏「佐久間『しょう』山と呼ぶ理由一決め手は松代本誓寺三部経『添記』」『週刊長野』第498号，平6・1・1，15頁。

Summary

Why to Pronounce Sakuma *Shōzan*

Hiroshi TAKAHASHI

Sakuma Shōzan, one of the influential proponents of westernization in Japan just before the Meiji Restoration, has also wrongly been called Sakuma Zōzan, a prolonged confusion that seemed to have begun just after Sakuma had adopted the *nom de plume* in 1836. Sakuma explained in his "Explication of Shōzan" that the pen name had been called after the hill near his house at Matsushiro, Shinano Province (now Nagano-ken). The mountain, he said, had been called "Zōzan" by the residents as it looked like a "zō," or an elephant ("zan" means a "mountain"). A hot controversy arose between those who insisted on calling him "Zōzan" as the name had been adopted from Mt. Zōzan and those who believed "Shōzan" should be used as the pen name of a Confucian scholar who was studying Chinese learning had to be called in Han pronunciation of Chinese characters, a suggestion that led to "Shōzan," not to "Zōzan," a Wu pronunciation unlikely to be used by Confucians in general.

The key to decide which is the right pronunciation can be found in the "Memorandum attached to the three sutras," which was dedicated to the Honseiji Temple at Matsushiro by Sakuma Shōzan in 1845. Sakuma declared in the document that his pen name should be pronounced "Shō" and "san," a combination of which makes for "Shōzan."

The listing of books, dictionaries, articles, and newspaper items concerning Sakuma Shōzan is also shown to indicate how often both the pronunciations have been used since the Meiji era until now.

添記

奉納　一部經銅刻縮軸者修理之命蘭人
刻自書者而非自己之菩提祈福亦非起立像塔
之謂也
所詮者利用泰西之機具而為邦家之欠賀
也管家之所謂魂魄漢文之謂也
所刻之經者鎮護國家之經典而修理又
為私豈夫關　天神地祇之懇哉自警自責
古旨在達再志無需再名
納經之意在時代之嫌惡愛不論善惡是非
不受凡評如何微衷有五百年之日志資而
已祕錄不許人目詎存也心
願哀愍攝護　本願寺如來山門奉納即日
燒燼蕩燼而為鏡光之料云爾

弘化二乙巳之月七日　象山草堂佐久間修理

啓　沐浴齋戒

尚記者法在新墓藤簾蒙雖擁蔽
之写而少慕之水音收似象嘯予暴
起志遂之今後人呼我名應去象者
所藏友山者矣也

寺誓本代松州信番十第輩四十二所願勅　書添經部三書ンペ山象間久佐